



Title	The Functional Differences of Subject Auxiliary Inversion Constructions
Author(s)	徳永, 和博
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/87786">https://hdl.handle.net/11094/87786</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 徳 永 和 博 ）	
論文題名	The Functional Differences of Subject Auxiliary Inversion Constructions (主語助動詞倒置構文類の機能的異同)
<p>論文内容の要旨</p> <p>本博士論文では、<i>as</i> 節 (e.g., ...<i>as does he</i>) や比較節 (e.g., ...<i>than does he</i>) に適用される随意的な主語助動詞倒置 (Subject Auxiliary Inversion, SAI) 構文を対象に、構文機能の観点から (1) 随意的な倒置が適用される動機づけは何か、(2) <i>so</i>、<i>neither</i>、<i>nor</i> に導かれる節に生起するSAIも <i>as</i> 節と比較節に適用される SAI と同様の動機づけが働いているか、(3) 人称代名詞が倒置した場合、<i>as</i> 節と異なり、なぜ比較節のSAIでは容認性が落ちるのか、の 3 点の問題について検討する。</p> <p>1 点目の問題に関しては、これまで随意的な倒置が適用される動機づけとして、(i) 文体 (Green 1978, 1982; Swan 2005)、(ii) 対照強勢 (Huddleston and Pullum 2002; Culicover and Winkler 2008 など)、(iii) end-focus および end-weight の原理の適用 (Biber <i>et al.</i> 1999, Fowler 2009; Otake 2016 など) の大きく 3 つの要因が提案されてきた。しかし、これらの先行研究は 1 文単位の分析が主流であり、文脈を考慮していたとしても、先行文脈との関係性が重視されており、<i>as</i> 節と比較節に適用される SAI に関する談話機能の特徴づけは限定的であった。本博士論文では、先行文脈だけでなく、後続文脈との関係性も視野に入れ、Givón (2018) の枠組みを援用して、<i>as</i> 節と比較節に適用される SAI は、それぞれ異なる談話機能を有しており、前者のみが倒置した主語（特に人称代名詞主語）を後続文脈のトピックとして導入する機能を有しており、その機能の発現が随意的な倒置の動機づけになっていることを主張する。</p> <p>2 点目の問題に関しては、随意的な SAI が適用された <i>as</i> 節と同様に人称代名詞の倒置を許す構文類を対象とする。具体的には、類似した意味を示す <i>so</i>-inversion construction (SIC)、<i>neither</i> および <i>nor</i> に導かれる SAI 構文（以下、SAI_<i>neither</i> および SAI_<i>nor</i> と略記）である。SIC に関して、大竹 (2016) は、主節と SIC の関係性については記述しているものの、後続文脈との関係性は考慮していない。また、Dorgeloh (1997) についても、SAI_<i>neither</i> および SAI_<i>nor</i> が先行文脈と深いつながりを持つことは指摘しているが、後続文脈との関係性については論じていない。本博士論文は、これらの SAI 構文類について、1 点目の問題点で述べた方法と同様の手法によって、それぞれの構文機能を分析し、SIC には随意的な SAI が適用された <i>as</i> 節と同様の談話機能が備わっているが、SAI_<i>neither</i> および SAI_<i>nor</i> はその談話機能が見られないことを指摘する。</p> <p>本博士論文の構成は以下である。第 2 章では、<i>as</i> 節と比較節に適用される SAI の要因について、文体、対照強勢、end-focus および end-weight の原理から説明した先行研究を概観し、これまでの研究では、先行文脈・後続文脈との関係性が十分に考慮されておらず、また、なぜ人称代名詞の倒置が <i>as</i> 節のみで認可されるのかについて説明が与えられていない点を指摘する。3 章では、本博士論文で用いる分析手法と 2 種のコーパス (the Corpus of Contemporary American English (COCA) とそのフルテキストデータ) について説明する。</p> <p>4 章では、SAI が適用された <i>as</i> 節と、SAI が適用されていない <i>as</i> 節を対象にした分析結果を示し、その結果を基に、SAI が適用された <i>as</i> 節には、倒置した主語をトピック性の高い要素として後続文脈に導入する topic-promoting function が備わっていることを主張する。また、この機能は固有名詞よりも人称代名詞が主語の場合に顕著に見られることを指摘する。5 章では、SAI が適用された <i>than</i> 節と、SAI が適用されていない <i>than</i> 節を対象に、4 章と同様の方法で分析した結果を示す。<i>than</i> 節の場合には、<i>as</i> 節の場合と異なり、topic-promoting function がほとんど見られないことを指摘する。</p> <p>6 章および 7 章では、なぜ SAI が適用された <i>as</i> 節と <i>than</i> 節では発現する機能が異なるのかを検討する。6 章では、統語的緊密性の観点から両者の違いを検討する。ここでは、Green (2017) の tense-aspect continuity と subject continuity の指標を用いて、<i>as</i> 節と比較節が主節とどの程度密接な関係性を持っているかを検討する。結果として、subject continuity の指標で見た場合、<i>as</i> 節は比較節と比べて主節との統語的緊密性が緩く、一方、比較節は、主節との緊密性が高いことを示す。7 章では、認知意味論の観点から、<i>as</i> 節と比較節の特性の違いを検</p>	

討する。ここでは、中右（1994）で提案された「階層意味論モデル」の観点から両者を検討し、*as* 節は discourse-modality (D-Mod) の特性を持ち、節境界を越えた機能を担う資格があるが、比較節は命題内容成分の一部として主節と緊密な関係を持ち、*as* 節と異なり節境界を超えるような特性を持たないことを主張する。また、*as* 節は D-Mod 表現であることから、有標構文として用いられると、情報を取り立てる機能を果たすことができ、倒置が動機づけられているが、比較節の場合は、D-Mod 表現ではないため、倒置の有無に関わらず、比較の基準を示すのみであり、倒置が動機づけられていないことを指摘し、この違いが、人称代名詞の倒置に関する容認度の差や、頻度差に起因していることを述べる。

8 章では、*as* 節と同様に人称代名詞の倒置を許す SIC、SAI\_*neither*、SAI\_*nor* について、SAI が適用された *as* 節と同様の機能が見られるかを検討する。これらの SAI について 4 章と同様の分析方法を用いて調査し、SIC には SAI が適用された *as* と同様の機能が見られることを主張する。また、SAI が適用された *as* 節と同様に人称代名詞が倒置した場合に、この機能が顕著に観察されることも指摘する。また、SAI が適用された *as* 節と SIC に見られる談話機能は、Lambrecht (1994) の “topic-promoting construction” と同様に、ある要素の acceptability を向上させる機能があるが、SAI が適用された *as* 節と SIC の場合には、すでに acceptability が高い deictic pronoun を明示的に談話に導入することで、さらにその acceptability を向上させる特徴があることを主張する。

9 章では、8 章で指摘した SAI が適用された *as* 節と SIC に見られる談話機能の特徴を、Asher and Lascarides (2003) で用いられている rhetorical relation の枠組みで再検討する。結論として、人称代名詞を主語に持つ SAI が適用された *as* 節および SIC は right-frontier constraint と Maximize Discourse Coherence (MDC) を満たす形で修辞関係を後続文脈と形成できるが、SAI が適用されていない無標の *as* 節や、固有名詞主語の SAI が適用された *as* 節、SAI が適用された比較節、SAI\_*neither* と SAI\_*nor* は、この 2 つの条件を満たす形で修辞関係を後続文脈と結ぶことができないため、right-frontier constraint や MDC の制約を満たすことができず、topic-promoting construction の機能を果たすことができないことを主張する。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 徳 永 和 博 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 岡田 禎之
	副 査 大阪大学 准教授 田中 英理
	副 査 大阪大学 教授 神山 孝夫
<b>論文審査の結果の要旨</b>	
以下、本文別紙	

## 論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： The Functional Differences of Subject Auxiliary Inversion Constructions

学位申請者 徳永 和博

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	岡田禎之
副査	大阪大学准教授	田中英理
副査	大阪大学教授	神山孝夫

## 【論文内容の要旨】

本論文は、様態のas節などに認められる随意的な主語助動詞倒置 (Subject Auxiliary Inversion, SAI) 構文を対象に、機能的観点から、(1) 随意的な倒置の動機づけはなにか、(2) 人称代名詞主語が倒置した場合、様態のas節と異なり、なぜ比較節のSAIでは容認性が落ちるのか、(3) *so, neither, nor* に導かれる節のSAIも様態のas節のSAIと同様の動機づけが働いているか、を中心的な問題として検討する。

(1)に関しては、これまで随意的な倒置が適用される動機づけとして、(i) 文体 (Green 1978, 1982; Swan 2005)、(ii) 対比強勢 (Huddleston and Pullum 2002; Culicover and Winkler 2008)、(iii) end-focusおよび end-weightの原理 (Biber *et al.* 1999, Fowler 2009; Otake 2016) の3つの要因が提案されてきた。しかし、先行研究は1文単位の分析が主流であり、文脈を考慮している場合も先行文脈との関係性が重視されており、SAIに関する談話機能の特徴づけは限定的であった。本論文は、先行文脈のみならず後続文脈との関係性も視野に入れ、Givón (2018)の枠組みを援用して、様態のas節に適用されるSAIと比較節のSAIは、それぞれ異なる談話機能を有しており、前者のみが倒置した主語（特に人称代名詞主語）を後続文脈のトピックとして導入する「話題設定機能(topic promoting function)」を有しており、その機能の発現が随意的な倒置の動機づけになっていると主張している。

(2)に関しては、比較節は主節との関係が緊密で、文外の要素との関係性が認めにくく、後続文脈のトピックとして比較節の主語を導入する動機づけは認められず、したがって人称代名詞という情報価値の少ない要素を文末に配置する動機づけが認められないことが原因であると指摘する。

(3)に関しては、様態のas節と同様に人称代名詞の倒置を許す構文類である *so-inversion construction* (SIC)、*neither* および *nor* に導かれるSAI構文 (SAI\_neither および SAI\_nor)を比較検討し、SICには様態のas節と同様に話題設定機能が備わっているが、SAI\_neither および SAI\_norはその機能が見られないことを指摘する。

本論文の構成を以下に述べる。2章では、様態のas節と比較節に適用されるSAIの要因について、先行研究を概観し、特に後続文脈との関係性が十分に考慮されておらず、なぜ人称代名詞の倒置が様態のas節のみで認可されるのかが説明されていないことを指摘する。3章は本論文で用いる分析手法と、使用するコーパスについて説明する。4章では、SAIが適用されたas節と、SAIが適用されていないas節を対象にした分析結果を示し、前者は倒置した主語をトピック性の高い要素として後続文脈に導入する「話題設定機能」をもつことを主張する。ま

た、この機能は固有名詞よりも人称代名詞が主語の場合に顕著に見られることを指摘する。5 章では、SAI が適用された比較節と、SAI が適用されていない比較節を対象に、4 章と同じ方法で分析し、比較節の場合には、as 節の場合と異なり、話題設定機能が認められないことを指摘する。

6 章では、統語的緊密性の観点から SAI が適用された as 節と比較節の違いを検討する。Green (2017) の tense-aspect continuity と subject continuity の指標を用いて、両者が主節と密接な関係性を持っているかを確認し、前者は主節との統語的緊密性が弱く、後者は緊密性が強いことを指摘する。7 章では、中右 (1994) で提案された「階層意味論モデル」による検討を行い、as 節は 談話モダリティの特性を持ち、節境界を越えた機能を担うが、比較節は命題内容成分の一部として機能し、節境界を超えるような特性を持たないことを主張する。

8 章では、as 節と同様に人称代名詞の倒置を許す SIC、SAI\_neither、SAI\_nor について、SAI が適用された as 節と同様の機能が見られるかを検討し、SIC には SAI が適用された as と同様の機能が見られることを主張する。また、ここでも人称代名詞が倒置した場合に、この機能が顕著に観察されることも指摘する。9 章では、これまでに観察された談話機能の特徴を、Asher and Lascarides (2003) の修辞関係理論の枠組みで再検討する。人称代名詞を主語に持つ SAI が適用された as 節および SIC は、Right-frontier Constraint と Maximize Discourse Coherence を満たす形で後続文脈と修辞関係が構築できるが、それ以外の節では、この 2 つの条件を満たすことができず、話題設定機能をもたないと結論づける。

#### 【論文審査の結果の要旨】

本論文は、随意的な主語・助動詞倒置構造を持つ談話機能について、コーパスデータを用いて、特に後続文脈との関わりから、その特徴を解明することを目指している。随意的主語・助動詞倒置構造に関しては、後置される主語要素の焦点化や情報量の多い要素の後置という理由が挙げられることが多い。英語母語話者の判断でも、単独で見た場合に随意的倒置が起きている構造でも起きていない構造でも、それ以上の大きな談話的差異は認められない、とする反応が多い。著者は、倒置が起きている場合には、後続文脈において倒置された主語要素が取り立てられ、話題として長く保持されていく特性があることを、特に代名詞主語が倒置される場合に着目して証明している。代名詞主語は焦点化の対象になりやすく、また情報量も少ない要素であるため、文末焦点や文末重視の考え方では随意的倒置の対象となることを説明できない。しかし、as や so に導かれる状態の従属節では、このような倒置構造が認められる。この問題に対して、当該の構文と後続文脈との関連性を探ることで、話題設定機能という談話的機能が認められることを明らかにしている。これに対して *than* や *as* が導く比較節や *neither* や *nor* が導く否定節などではこの機能が認められないことを指摘し、談話的機能が異なることを論じている。

この違いを、主節と従属節の統語的緊密性や、当該の従属節のモダリティ特性の違いに原因が求められることを指摘し、更に談話要素の修辞関係表示モデルを援用して捉え直そうとするなど、単に記述的な一般化を求めるだけでなく、その理由を原理的に探る努力も十分に認められる。

その一方で検証に用いられているデータは限定的なものであるため、更に広範なデータを含めた精査が必要な部分があり、修辞関係表示モデルにおける Right-frontier の認定条件や関係性のタイプの特定手続きに関しても、更に検討すべき余地が認められるなど、問題点も認められる。しかしながら、これらの問題点によって本論文の独自性、新規性が損なわれるものでは決していない。したがって、本論文は、博士(文学)を認めるにふさわしい論文であると認定する。